

Oracle® Application Server

クイック・インストレーション・ガイド

10g リリース 2 (10.1.2) for Linux Itanium

部品番号 : B50676-01

2009 年 1 月

ORACLE®

原本名 : Oracle Application Server Quick Installation Guide, 10g Release 2 (10.1.2) for Linux Itanium

原本部品番号 : B25820-01

Copyright © 2008 Oracle. All rights reserved.

制限付権利の説明

このプログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）には、オラクル社およびその関連会社に所有権のある情報が含まれています。このプログラムの使用または開示は、オラクル社およびその関連会社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権と工業所有権に関する法律により保護されています。

独立して作成された他のソフトウェアとの互換性を得るために必要な場合、もしくは法律によって規定される場合を除き、このプログラムのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイル等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更される場合があります。オラクル社およびその関連会社は、このドキュメントに誤りが無いことの保証は致し兼ねます。これらのプログラムのライセンス契約で許諾されている場合を除き、プログラムを形式、手段（電子的または機械的）、目的に関係なく、複製または転用することはできません。

このプログラムが米国政府機関、もしくは米国政府機関に代わってこのプログラムをライセンスまたは使用する者に提供される場合は、次の注意が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the Programs, including documentation and technical data, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement, and, to the extent applicable, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software--Restricted Rights (June 1987). Oracle USA, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このプログラムは、核、航空、大量輸送、医療あるいはその他の本質的に危険を伴うアプリケーションで使用されることを意図しておりません。このプログラムをかかるとして使用する際、上述のアプリケーションを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性 (redundancy)、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。万一かかかるプログラムの使用に起因して損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切責任を負いかねます。

Oracle, JD Edwards, PeopleSoft, Siebel は米国 Oracle Corporation およびその子会社、関連会社の登録商標です。その他の名称は、他社の商標の可能性がありま。

このプログラムは、第三者の Web サイトへリンクし、第三者のコンテンツ、製品、サービスへアクセスすることがあります。オラクル社およびその関連会社は第三者の Web サイトで提供されるコンテンツについては、一切の責任を負いかねます。当該コンテンツの利用は、お客様の責任になります。第三者の製品またはサービスを購入する場合は、第三者と直接の取引となります。オラクル社およびその関連会社は、第三者の製品およびサービスの品質、契約の履行（製品またはサービスの提供、保証義務を含む）に関しては責任を負いかねます。また、第三者との取引により損失や損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

はじめに

このマニュアルで説明されている各種サービスは日本オラクル社から提供されるサービスです。サービスは、製品をご購入された日本オラクル正規代理店各社から提供される場合もありますが、サービス内容はこのマニュアルの説明と異なることがあります。

このマニュアルでは、次に示す **Oracle Application Server** のインストール・タイプのインストール方法について説明します。

- J2EE and Web Cache 中間層
- OracleAS Infrastructure
- Portal and Wireless 中間層
- Business Intelligence and Forms 中間層

このマニュアルの内容

- [ご注文内容の確認](#)
- [このマニュアルで説明するインストール・タイプ](#)
- [要件](#)
- [インストーラの起動](#)
- [J2EE and Web Cache \(Java 開発者トポロジ\) のインストール](#)
- [Portal and Wireless または Business Intelligence and Forms 開発者トポロジのインストール \(OracleAS Infrastructure を含む\)](#)

4 Oracle Application Server クイック・インストール・ガイド

- 「ようこそ」 ページへのアクセス
- 既存の Oracle データベースへの OracleAS Metadata Repository のインストール
- 追加情報
- その他の情報
- ドキュメントのアクセシビリティについて

1 ご注文内容の確認

メディア・パック受領後、ただちに同梱の Packing List をもとにパッケージ内容物を確認してください。破損、欠品、不明な点などのお問合せは、本製品をご購入された日本オラクル正規代理店、もしくは Oracle Direct までお寄せください。

メディア・パックには、このマニュアルの他に次の製品が同梱されています。

- 製品メディア
製品メディアには、製品をインストールするためのソフトウェアおよび README ファイルが含まれています。
- Start Here CD (赤いレーベル)
Start Here CD には、インストール・マニュアル、リリース・ノート、お役に立つインターネット・リンクおよびメディア・パックに関する情報が含まれています。
- Oracle Application Server JP Documentation Library
Oracle Application Server JP Documentation Library には、オラクル製品のオンライン・ドキュメントが含まれています。

注意： メディア・パックによって、Start Here CD や Oracle Application Server JP Documentation Library が同梱されていない製品があります。Packing List を参照して確認してください。

2 このマニュアルで説明するインストール・タイプ

このマニュアルでは、次に示す構成で Oracle Application Server をインストールするユーザーを対象にしています。

- **Java Developer** トポロジ: Java 開発者用です。このトポロジでは、**J2EE and Web Cache** 中間層がインストールされ、ここでアプリケーションをデプロイできます。
- **Portal and Wireless** 開発者トポロジ: J2EE and Web Cache 機能のほかに、OracleAS Portal、Oracle Application Server Wireless、Oracle Internet Directory または Oracle Application Server Single Sign-On 機能を使用する Java 開発者用です。このトポロジによって、**Portal and Wireless** 中間層および **OracleAS Infrastructure** がインストールされます。
- **Business Intelligence and Forms** 開発者トポロジ: J2EE and Web Cache 機能および Portal and Wireless 機能のほかに、OracleAS Personalization、OracleBI Discoverer、OracleAS Reports Services または OracleAS Forms Services 機能を使用する開発者用です。このトポロジによって、**Business Intelligence and Forms** 中間層および **OracleAS Infrastructure** がインストールされます。

より複雑なトポロジが必要な場合の詳細なインストール手順については、**Oracle Application Server** のインストール・ガイドを参照してください。

Oracle Application Server をインストールする前に、最新情報について、**Oracle Application Server** のリリース・ノートをお読みください。

3 要件

ご使用のコンピュータが、次の最小要件を満たしていることを確認してください。

- 第 3.1 項「システム要件の確認」
- 第 3.2 項「ソフトウェア要件の確認」
- 第 3.3 項「OracleAS Web Cache に必要なカーネル・パラメータの確認」
- 第 3.4 項「OracleAS Metadata Repository に必要なカーネル・パラメータの確認」
- 第 3.5 項「インベントリ・ディレクトリのオペレーティング・システム・グループの作成」
- 第 3.6 項「データベース管理者のオペレーティング・システム・グループの作成」
- 第 3.7 項「オペレーティング・システム・ユーザーの作成」
- 第 3.8 項「環境変数の確認」
- 第 3.9 項「ポート 1521 が使用されているかどうかの確認」

3.1 システム要件の確認

ご使用のコンピュータは、次の要件を満たしている必要があります。

サポートされるオペレーティング・システム

- Red Hat Enterprise Linux AS/ES 3.0
- Red Hat Enterprise Linux AS/ES 4.0
- SUSE Linux Enterprise Server 9

サポートされる Linux Itanium オペレーティング・システムの最新のリストについては、Oracle *MetaLink* を確認してください。Linux Itanium ベンダーによってサポートされない、カスタマイズされたカーネルまたはモジュールはサポートされません。

その他のシステム要件

次の表に、その他のシステム要件を示します。

表 1 最小システム要件

	J2EE and Web Cache	Portal and Wireless	Business Intelligence and Forms	OracleAS Infrastructure
メモリー（後述の 注意（1）を参照）	512MB	1GB	1GB	1GB

表 1 最小システム要件（続き）

	J2EE and Web Cache	Portal and Wireless	Business Intelligence and Forms	OracleAS Infrastructure
ディスク領域	1GB	1.5GB	2.5GB	5.5GB（後述 の注意（2）を 参照）
TMP ディレクトリ 内の領域	250MB	250MB	250MB	250MB
スワップ領域	1.5GB	1.5GB	1.5GB	1.5GB

注意：

(1) Business Intelligence and Forms または Portal and Wireless を OracleAS Infrastructure と同一のコンピュータにインストールする場合は、1.5GB 以上のメモリーが必要です。

(2) OracleAS Infrastructure のインストール先ディスクとは異なるディスクに OracleAS Metadata Repository データベースのデータ・ファイルをインストールできます。この場合は、データ・ファイル用に 3GB 以上の空きディスク領域を確保してください。

これらの要件を確認するには、次の手順を実行します。

1. 物理 RAM のサイズを確認するには、次のコマンドを入力します。

```
# grep MemTotal /proc/meminfo
```

2. 空きディスク領域の大きさを確認するには、次のコマンドを入力します。

```
prompt> df -k dir
```

dir は、Oracle ホーム・ディレクトリに置き換えてください。Oracle ホーム・ディレクトリがない場合は、親ディレクトリに置き換えてください。たとえば、Oracle Application Server を /opt/oracle/infra にインストールする場合は、*dir* を /opt/oracle または /opt/oracle/infra に置き換えます。

3. 使用可能なスワップ領域の大きさを確認するには、次のコマンドを入力します。

```
# grep SwapTotal /proc/meminfo
```

必要に応じて、追加のスワップ領域を構成する方法については、ご使用のオペレーティング・システムのドキュメントを参照してください。

3.2 ソフトウェア要件の確認

次のいずれかの項を参照してソフトウェア要件を確認します。

- 第 3.2.1 項「Red Hat Enterprise Linux AS/ES 3.0 システムのソフトウェア要件」
- 第 3.2.2 項「Red Hat Enterprise Linux AS/ES 4.0 システムのソフトウェア要件」
- 第 3.2.3 項「SUSE Linux Enterprise Server 9 システムのソフトウェア要件」

3.2.1 Red Hat Enterprise Linux AS/ES 3.0 システムのソフトウェア要件

Oracle Application Server を Red Hat Enterprise Linux AS/ES 3.0 システムにインストールする前に、次の手順を実行します。

1. root ユーザーとしてログインします。
2. Red Hat Enterprise Linux AS/ES 3.0 がインストールされていることを確認します。

```
# cat /etc/issue
```

```
Red Hat Enterprise Linux AS release 3 (Taroon Update 6)
```

サポートされるカーネルの最小バージョンは次のとおりです。

- kernel-2.4.21-37.EL 以上

3. Update 6 がインストールされていることを確認します。

```
# cat /etc/redhat-release
```

```
Red Hat Enterprise Linux AS release 3 (Taroon Update 6)
```

4. 次のバージョン以上のソフトウェア・パッケージがインストールされていることを確認します。

```
make-3.79.1-17.1  
gcc-3.2.3-53  
gcc-c++-3.2.3-53  
glibc-2.3.2-95.37  
glibc-common-2.3.2-95.37  
glibc-devel-2.3.2-95.37  
compat-db-4.0.14-5.1  
compat-gcc-7.3-2.96.128  
compat-gcc-c++-7.3-2.96.128  
compat-libstdc++-devel-7.3-2.96.128  
libstdc++-3.2.3-53  
libstdc++-devel-3.2.3-53  
openmotif21-2.1.30-9.RHEL3.6  
sysstat-5.0.5-5.rhel3  
setarch-1.3-1  
libaio-0.3.96-5  
libaio-devel-0.3.96-5  
binutils-2.14.90.0.4-39  
pdksh-5.2.14-21
```

パッケージがインストールされているかどうかを確認するには、次のようなコマンドを入力します。

```
# rpm -q package_name
```

パッケージがインストールされていない場合は、次のコマンドを使用してダウンロードおよびインストールします。

```
# rpm -i package_name
```

パッケージをインストールする場合は、使用している rpm ファイルのアーキテクチャが適切で、最適化されていることを確認します。rpm ファイルのアーキテクチャを確認するには、次のコマンドを実行します。

```
# rpm -q package_name --queryformat "%{arch}¥n"
```

次の例の場合、glibc rpm ファイルには Intel アーキテクチャが適しています。

```
# rpm -q glibc --queryformat "%{arch}¥n"  
ia64
```

3.2.2 Red Hat Enterprise Linux AS/ES 4.0 システムのソフトウェア要件

Oracle Application Server を Red Hat Enterprise Linux AS/ES 4.0 システムにインストールする前に、次の手順を実行します。

1. root ユーザーとしてログインします。
2. Red Hat Enterprise Linux AS/ES 4.0 がインストールされていることを確認します。

```
# cat /etc/issue
```

```
Red Hat Enterprise Linux AS release 4 (Nahant Update 1)
```

サポートされるカーネルの最小バージョンは次のとおりです。

■ 2.6.9-11.EL 以上

3. Update 1 以上がインストールされていることを確認します。

```
# cat /etc/redhat-release
```

```
Red Hat Enterprise Linux AS release 4 (Nahant Update 1)
```

4. 次のバージョン以上のソフトウェア・パッケージがインストールされていることを確認します。

```
glibc-2.3.4-2.9
```

```
glibc-common-2.3.4-2.9
```

```
glibc-devel-2.3.4-2.9
```

```
gcc-3.4.3-22.1
```

```
gcc-c++-3.4.3-22.1
```

```
libstdc++-3.4.3-22.1  
libstdc++-devel-3.4.3-22.1  
compat-libstdc++-296-2.96-132.7.2  
compat-db-4.1.25-9  
binutils-2.15.92.0.2-13  
make-3.80-5  
pdksh-5.2.14-30  
sysstat-5.0.5-1  
openmotif21-2.1.30-11.RHEL4.4  
libaio-devel-0.3.103-3  
libaio-0.3.103-3
```

パッケージがインストールされているかどうかを確認するには、次のようなコマンドを入力します。

```
# rpm -q package_name
```

パッケージがインストールされていない場合は、次のコマンドを使用してダウンロードおよびインストールします。

```
# rpm -i package_name
```

パッケージをインストールする場合は、使用している rpm ファイルのアーキテクチャが適切で、最適化されていることを確認します。rpm ファイルのアーキテクチャを確認するには、次のコマンドを実行します。

```
# rpm -q package_name --queryformat "%{arch}¥n"
```

次の例の場合、glibc rpm ファイルには Intel アーキテクチャが適しています。

```
# rpm -q glibc --queryformat "%{arch}¥n"
ia64
```

3.2.3 SUSE Linux Enterprise Server 9 システムのソフトウェア要件

Oracle Application Server を SUSE Linux Enterprise Server 9 システムにインストールする前に、次の手順を実行します。

1. root ユーザーとしてログインします。
2. インストールされている Linux の配布版およびバージョンを確認するには、次のコマンドを入力します。

```
# cat /etc/issue
Welcome to SUSE LINUX Enterprise Server 9 (ia64) - Kernel ¥r
(¥l)
```

3. サービス・パック 2 以上の SUSE Linux Enterprise Server 9 がインストールされているかどうかを確認するには、次のコマンドを入力します。

```
# cat /etc/issue/SuSE-release
SUSE Linux Enterprise Server 9 (ia64)
VERSION=9
PATCHLEVEL=2
```

4. Linux カーネルのバージョン 2.6.5-7.244 以上がインストールされているかどうかを確認するには、次のコマンドを入力します。

```
# uname -r
2.6.5-7.244
```

5. 次のバージョン以上のソフトウェア・パッケージがインストールされていることを確認します。

```
glibc-2.3.3-98.61
gcc-3.3.3-43.41
gcc-c++-3.3.3-43.41
libstdc++-3.3.3-43.41
libstdc++-devel-3.3.3-43.41
openmotif-libs-2.2.2-519.4
pdksh-5.2.14-780.7
make-3.80-184.1
sysstat-5.0.1-35.7
```

```
binutils-2.15.90.0.1.1-32.10
glibc-devel-2.3.3-98.61
libaio-0.3.102-1.5
libaio-devel-0.3.102-1.5
compat-2004.7.1-1.2
db1-1.85-85.1
```

パッケージがインストールされているかどうかを確認するには、次のようなコマンドを入力します。

```
# rpm -q package_name
```

パッケージがインストールされていない場合は、次のコマンドを使用してダウンロードおよびインストールします。

```
# rpm -i package_name
```

パッケージをインストールする場合は、使用している rpm ファイルのアーキテクチャが適切で、最適化されていることを確認します。rpm ファイルのアーキテクチャを確認するには、次のコマンドを実行します。

```
# rpm -q package_name --queryformat "%{arch}%n"
```

次の例の場合、`glibc rpm` ファイルには Intel アーキテクチャが適しています。

```
# rpm -q glibc --queryformat "%{arch}%n"  
ia64
```

6. `perl` 実行ファイルへのシンボリック・リンクがない場合は、作成します。

```
prompt> ln -sf /usr/bin/perl /usr/local/bin/perl
```

7. `fuser` 実行ファイルへのシンボリック・リンクがない場合は、作成します。

```
prompt> ln -sf /bin/fuser /sbin/fuser
```

8. `orarun` パッケージをインストールした場合は、次の手順を実行して環境をリセットします。

- a. `root` ユーザーで次のコマンドを入力します。

```
prompt> cd /etc/profile.d  
prompt> mv oracle.csh oracle.csh.bak  
prompt> mv oracle.sh oracle.sh.bak  
prompt> mv alljava.sh alljava.sh.bak  
prompt> mv alljava.csh alljava.csh.bak
```

- b. `oracle` ユーザー・アカウントにログインします。

- c. \$HOME/.profile ファイルが存在する場合は、テキスト・エディタを使用して、このファイルから次の行をコメントアウトします。

```
.. ./oracle
```

- d. oracle ユーザー・アカウントからログアウトします。
- e. oracle ユーザー・アカウントにログインして、変更を有効にします。

9. システムに Java パッケージがインストールされている場合は、JAVA_HOME などの Java 環境変数を設定解除します。

注意： SLES 9 の配布版に付属の Java パッケージはインストールしないことをお勧めします。

10. /etc/services ファイルを確認して、次のポート範囲が使用可能であることを確認します。
- Oracle Internet Directory に必要なポート 3060 ~ 3129
 - Oracle Internet Directory (SSL) に必要なポート 3130 ~ 3199
 - Oracle Enterprise Manager (コンソール) に必要なポート 1812 ~ 1829

- Oracle Enterprise Manager (エージェント) に必要なポート 1830 ~ 1849
- Oracle Enterprise Manager (RMI) に必要なポート 1850 ~ 1869

必要に応じて、`/etc/services` ファイルからエントリを削除して、システムを再起動します。エントリを削除するには、**CD-ROM (Disk 1)** および **DVD-ROM** の `utils/3167528/` ディレクトリに格納されている `perl` スクリプトを使用します。スクリプトは、`root` ユーザーで実行します。このスクリプトは、パッチ **3167528** から入手できます。パッチは、次のサイトから入手できます。

<https://metalink.oracle.com>

これらのポートが使用可能になっていないと、インストール中に、関連する **Configuration Assistant** が失敗します。

11. Network Information Service (NIS) を使用している場合は、次の手順を実行します。

- a.** 次の行が `/etc/yp.conf` ファイルにあることを確認します。

```
hostname.domainname broadcast
```

- b.** 次の行が `/etc/nsswitch.conf` ファイルにあることを確認します。

```
hosts: files nis dns
```

12. /etc/hosts ファイルの localhost エントリが IPv4 エントリであることを確認します。localhost の IP エントリが IPv6 形式の場合、インストールは正常に行われません。IPv6 エントリを次に示しています。

```
# special IPv6 addresses
::1          localhost ipv6-localhost ipv6-loopback
::1          ipv6-localhost ipv6-loopback
```

この例の /etc/hosts ファイルを修正するには、次のように、localhost エントリをコメント化します。

```
# special IPv6 addresses
# ::1          localhost ipv6-localhost ipv6-loopback
# ::1          ipv6-localhost ipv6-loopback
```

エントリをコメント化するには、CD-ROM (Disk 1) の
utils/4015045/ ディレクトリおよび DVD-ROM の
application_server/utils/4015045/ ディレクトリに格納されている perl スクリプトを使用します。スクリプトは、root ユーザーで実行します。このスクリプトは、パッチ 4015045 から入手できません。パッチは、次のサイトから入手できます。

<http://metalink.oracle.com>

3.3 OracleAS Web Cache に必要なカーネル・パラメータの確認

この項の内容は、OracleAS Web Cache をインストールする場合に該当しません。

- J2EE and Web Cache 中間層をインストールする場合、OracleAS Web Cache コンポーネントは、オプションです。
 - Portal and Wireless または Business Intelligence and Forms 中間層をインストールする場合、OracleAS Web Cache コンポーネントは、常にインストールされます。
1. 次のコマンドを実行して、`rlim_fd_max` カーネル・パラメータが 65536 以上に設定されていることを確認します。

```
prompt> ulimit -Hn
```

2. 次のコマンドを実行して、`nofile` カーネル・パラメータが 65536 以上に設定されていることを確認します。

```
prompt> ulimit -Hn
```

3. コマンドによって 65536 未満の値が返される場合は、`/etc/security/limits.conf` ファイルに次の行を追加（テキスト・エディタを使用してファイルを編集）します。

```
*          hard    nofile  65536
```

/etc/security/limits.conf ファイルを編集するには、root ユーザーである必要があります。

4. コンピュータを再起動して、新しい値を有効にします。

3.4 OracleAS Metadata Repository に必要なカーネル・パラメータの確認

この項の内容は、OracleAS Infrastructure をインストールする場合にのみ該当します。

次の表に示すカーネル・パラメータが、示されている計算式、または推奨値以上の値に設定されていることを確認します。表の後の手順では、値の確認および設定方法について説明します。

注意： Linux Itanium スレッド・モデルは、各スレッドのプロセスを作成します。Oracle Application Server は、パフォーマンスを向上させるために、高度にマルチスレッド化されています。このため、Linux Itanium では、カーネルが何百ものプロセスを処理できる必要があります。

パラメータ	値	ファイル
semmsl	256	/proc/sys/kernel/sem
semmns	32000	
semopm	100	
semmni	142	
shmall	2097152	/proc/sys/kernel/shmall
shmmax	2147483648	/proc/sys/kernel/shmmax
shmmni	4096	/proc/sys/kernel/shmmni
msgmax	8192	/proc/sys/kernel/msgmax
msgmnb	65535	/proc/sys/kernel/msgmnb
msgmni	2878	/proc/sys/kernel/msgmni
file-max	131072	/proc/sys/fs/file-max
ip_local_port_range	最小 : 1024 最大 : 65000	/proc/sys/net/ipv4/ip_local_port_range

注意： パラメータの現在の値がこの表に示されている値よりも大きい場合は、パラメータの値を変更しないでください。

これらのカーネル・パラメータに現在指定されている値を表示し、必要に応じてその値を変更するには、次の手順を実行します。

1. 次のようなコマンドを入力して、カーネル・パラメータの現在の値を表示します。

注意： 現在の値を記録して、変更する必要がある値を特定してください。

パラメータ	コマンド
semmsl、semms、semopm および semmni	# /sbin/sysctl -a grep sem このコマンドは、セマフォ・パラメータの値をリスト順に表示します。
shmmax、shmall および semmni	# /sbin/sysctl -a grep shm

パラメータ**コマンド**

msgmax、msgmnb および msgmni # /sbin/sysctl -a | grep msg

file-max # /sbin/sysctl -a | grep file-max

ip_local_port_range # /sbin/sysctl -a | grep ip_local_port_range

このコマンドはポート番号の範囲を表示します。

2. カーネル・パラメータの値が推奨値と異なる場合は、次の手順を実行します。
 - a. テキスト・エディタを使用して、`/etc/sysctl.conf` ファイルを作成または編集し、次のような行を追加または編集します。

注意： 値を変更するカーネル・パラメータの行のみを含めます。セマフォ・パラメータ (`kernel.sem`) の場合は、4つの値すべてを指定する必要があります。ただし、現在の値が推奨値よりも大きい場合は、大きい方の値を指定してください。

```
kernel.shmall = 2097152
kernel.shmmax = 2147483648
kernel.shmmni = 4096
# semaphores: semmsl, semmns, semopm, semmni
kernel.sem = 256 32000 100 142
fs.file-max = 131072
net.ipv4.ip_local_port_range = 1024 65000
kernel.msgmni = 2878
kernel.msgmax = 8192
kernel.msgmnb = 65535
```

/etc/sysctl.conf ファイルに値を指定することで、システムを再起動しても、その値は保持されます。

- b.** 次のコマンドを入力して、カーネル・パラメータの現在の値を変更します。

```
# /sbin/sysctl -p
```

このコマンドからの出力を確認して、値が正しいことを確認します。値が正しくない場合は、/etc/sysctl.conf ファイルを編集してから、このコマンドを再入力します。

- c. SUSE Linux Enterprise Server システムの場合にのみ、システムの再起動時に `/etc/sysctl.conf` ファイルが読み取られるように次のコマンドを入力します。

```
# chkconfig boot.sysctl on
```

oracle ユーザーのシェル制限の設定

Linux Itanium のソフトウェアのパフォーマンスを向上させるには、ユーザーのデフォルトのシェルに応じて、oracle ユーザーの次のシェル制限を増やす必要があります。

Bourne または Bash シェル制限	Korn シェル制限	C または tcsh シェル制限	ハード制限
nofile	nofile	descriptors	65536
noproc	processes	maxproc	16384

シェル制限を増やすには、次の手順を実行します。

1. `/etc/security/limits.conf` ファイルに次の行を追加します。

```
*      soft  nproc      2047
*      hard  nproc      16384
*      soft  nofile     2048
*      hard  nofile     65536
```

2. /etc/pam.d/login ファイルに次の行が存在しない場合は、追加します。

```
session    required    /lib/security/pam_limits.so
```

3. oracle ユーザーのデフォルトのシェルに応じて、デフォルトのシェルの起動ファイルを次のように変更します。

Bourne、Bash または Korn シェルの場合、/etc/profile ファイルに次の行を追加します。

```
if [ $USER = "oracle" ]; then
    if [ $SHELL = "/bin/ksh" ]; then
        ulimit -p 16384
        ulimit -n 65536
    else
        ulimit -u 16384 -n 65536
    fi
fi
```

C または **tcsh** シェルの場合は、/etc/csh.login ファイルに次の行を追加します。

```
if ( $USER == "oracle" ) then
    limit maxproc 16384
    limit descriptors 65536
endif
```

3.5 インベントリ・ディレクトリのオペレーティング・システム・グループの作成

コンピュータにはじめて Oracle 製品をインストールする場合は、インベントリ・ディレクトリにオペレーティング・システム・グループを作成します。インストーラによってインベントリ・ディレクトリにファイルが作成され、コンピュータにインストールされた Oracle 製品が追跡されます。

このマニュアルでは、このグループの名前に `oinstall` を使用します。

第 3.7 項「オペレーティング・システム・ユーザーの作成」で、オペレーティング・システム・ユーザーを作成し、このグループをユーザーのプライマリ・グループに設定します。

インベントリ・ディレクトリ用に別のグループを用意することによって、様々なユーザーがコンピュータに Oracle 製品をインストールできるようにします。ユーザーは、インベントリ・ディレクトリへの書込み権限が必要です。これには、`oinstall` グループに所属します。

インベントリ・ディレクトリのデフォルトの名前は `oraInventory` です。

コンピュータにインベントリ・ディレクトリがすでにあるかどうかは不明な場合は、`/etc/oraInst.loc` ファイルを参照します。このファイルには、インベントリ・ディレクトリの場所と、それを所有するグループが一覧表示されます。ファイルがない場合は、そのコンピュータには Oracle 製品がインストールされていません。

グループの作成方法

oinstall グループを作成するには、root ユーザーで次のように入力します。

```
# /usr/sbin/groupadd oinstall
```

3.6 データベース管理者のオペレーティング・システム・グループの作成

前述の項と同じ手順で、「dba」と呼ばれるオペレーティング・システム・グループを作成します。次の手順で、オペレーティング・システム・ユーザーを作成すると、この dba グループは、ユーザーのセカンダリ・グループに設定されます。

3.7 オペレーティング・システム・ユーザーの作成

Oracle 製品のインストールとアップグレードを行うオペレーティング・システム・ユーザーを作成します。このマニュアルでは、このユーザーを oracle ユーザーと呼びます。

ユーザーの作成方法

oinstall グループの一部として oracle オペレーティング・システム・ユーザーを作成するには、root ユーザーで次のコマンドを入力します。

```
# /usr/sbin/useradd -g oinstall oracle
```

オペレーティング・システム・ユーザーおよびグループの詳細は、オペレーティング・システムのドキュメントを参照するか、またはシステム管理者に連絡してください。

次のコマンドを入力して `oracle` ユーザーのパスワードを設定し、画面の指示に従います。

```
# passwd oracle
```

3.8 環境変数の確認

Oracle Application Server をインストールするオペレーティング・システム・ユーザーは、次の環境変数を設定（または設定解除）する必要があります。

表 2 環境変数

環境変数	設定または設定解除
DISPLAY	インストーラのウィンドウを表示するモニターに設定します。
ORACLE_HOME	設定しないでください。
ORACLE_SID	設定しないでください。
TNS_ADMIN	設定しないでください。

表 2 環境変数 (続き)

環境変数	設定または設定解除
PATH、CLASSPATH および LD_LIBRARY_PATH	Oracle ホーム・ディレクトリ内のディレクトリを参照するパスは含めないでください。
TMP	任意です。設定解除した場合、デフォルトで /tmp に設定されます。
ORA_NLS33	設定しないでください。
LD_BIND_NOW	設定しないでください。

3.8.1 環境変数の設定方法 この項では、環境変数を設定する方法を説明します。

C シェルの場合：

```
% setenv variable_name value
```

例 (C シェル)：

```
% setenv DISPLAY test.mycompany.com:0.0
```

Bourne シェルまたは Korn シェルの場合：

```
$ variable_name=value; export variable_name
```

例 (Bourne/Korn シェル) :

```
$ DISPLAY=test.mydomain.com:0.0; export DISPLAY
```

3.8.2 環境変数のヒント この項では、環境変数を設定する場合の注意事項を説明します。

- 環境変数を `.profile` ファイルに設定すると、変数は読み取られません。環境変数に正しい値が設定されていることを確認するには、インストーラを実行するシェル内で値を確認します。
- 環境変数の値をチェックするには、`env` コマンドを使用します。これにより、現在定義されているすべての環境変数とそれらの値が表示されます。

```
% env
```

- `su` コマンドを使用してユーザーを切り替える (たとえば、`root` ユーザーから `oracle` ユーザーへ切り替える) 場合、新しいユーザーは環境変数を確認します。これは、環境変数は新しいユーザーには渡されないためです。これは、`su` に、`-` パラメータを付けて (`su - user`) 実行した場合でも発生する可能性があります。

```
# /* root user */  
# su - oracle  
% env
```

3.9 ポート 1521 が使用されているかどうかの確認

この項の内容は、OracleAS Infrastructure をインストールする場合にのみ該当します。

OracleAS Infrastructure では、Oracle データベースがインストールされ、デフォルトでポート 1521 が使用されます。ポート 1521 が使用されているかどうかを確認するには、次のコマンドを実行します。

```
prompt> netstat -an | grep 1521
```

ポート 1521 がサード・パーティのアプリケーションによって使用されている場合は、別のポートを使用するようにアプリケーションを構成する必要があります。

ポート 1521 が既存の Oracle データベース・リスナーで使用されている場合は、OracleAS Infrastructure をインストールする前にリスナーを停止する必要があります。

詳細は、Oracle Application Server のインストレーション・ガイドを参照してください。

4 インストーラの起動

インストーラを起動するには、次の手順を実行します。

1. Administrators グループのメンバーであるユーザーとしてコンピュータにログインします。

2. ディスクを挿入します。

CD-ROM の場合 : Oracle Application Server Disk 1 を挿入します。

DVD-ROM の場合 : Oracle Application Server DVD-ROM を挿入します。

3. コンピュータに自動マウント機能がない場合は、CD-ROM または DVD-ROM を手動でマウントする手順について、[第 4.1 項「CD-ROM または DVD-ROM のマウント」](#)を参照してください。

ディスクが Red Hat Enterprise Linux AS/ES システムに自動的にマウントされたかどうかを確認するには、次のコマンドを入力します。

```
# ls /mnt/cdrom
```

ディスクが SUSE Linux Enterprise Server システムに自動的にマウントされたかどうかを確認するには、次のコマンドを入力します。

```
# ls /media/cdrom
```

4. マウント・ポイントが Red Hat Enterprise Linux AS/ES の /mnt/cdrom および SUSE Linux Enterprise Server の /media/cdrom であるインストーラを起動します。

注意: インストーラは、マウント・ポイント・ディレクトリから起動しないでください。次に示す「cd」コマンドは、インストーラがマウント・ポイントから起動されないように、カレント・ディレクトリをホーム・ディレクトリに変更します。

CD-ROM:

```
prompt> cd
prompt> mountpoint/1012disk1/runInstaller
```

DVD-ROM:

```
prompt> cd
prompt> mountpoint/application_server/runInstaller
```

これによって Oracle Universal Installer が起動され、ここから Oracle Application Server をインストールできます。

4.1 CD-ROM または DVD-ROM のマウント

コンピュータが CD-ROM または DVD-ROM を自動マウントしない場合は、次の手順を実行します。

1. ディスク・ドライブに CD-ROM または DVD-ROM を挿入します。

2. root ユーザーでログインし、すべてのユーザーがアクセスできるディスクのマウント・ポイント・ディレクトリを作成します。

```
% su
Password:
# mkdir /cdrom
# chmod 777 /cdrom
```

3. ディスクのマウント・ポイント・ディレクトリにディスク・ドライブをマウントします。

Red Hat Enterprise Linux AS/ES システムの場合は、次のように入力します。

```
# mount -t iso9660 /dev/cdrom /mnt/cdrom
```

SUSE Linux Enterprise Server システムの場合は、次のように入力します。

```
# mount -t iso9660 /dev/cdrom /media/cdrom
```

4. ルート・アカウントを終了します。

```
# exit
```

5 J2EE and Web Cache (Java 開発者トポロジ) のインストール

このトポロジによって、J2EE and Web Cache 中間層がインストールされ、次のコンポーネントが提供されます。

- Oracle HTTP Server: これは Web サーバーです。
- Oracle Application Server Containers for J2EE (OC4J) : これは、J2EE アプリケーションのデプロイおよびテストに使用できる J2EE コンテナです。
- OracleAS Web Cache: このコンポーネントは、オブジェクトをキャッシュして Oracle HTTP Server の負荷を削減し、パフォーマンスを向上させます。

J2EE and Web Cache 中間層をインストールするには、次の手順を実行します。

1. インストーラを起動します。詳細は、[第4章「インストーラの起動」](#)を参照してください。
2. 「ようこそ」画面
「次へ」をクリックします。
3. コンピュータにはじめて Oracle 製品をインストールする場合は、インストーラによって次の画面が表示されます。

a. 「インベントリ・ディレクトリと資格証明の指定」画面

「インベントリ・ディレクトリのフルパスを入力してください」：インベントリ・ディレクトリへのフルパスを入力します。このディレクトリは、製品ファイル用の Oracle ホーム・ディレクトリとは異なります。

例：/opt/oracle/oraInventory

「オペレーティング・システム・グループ名の指定」：インベントリ・ディレクトリへの書込み権限を持つオペレーティング・システム・グループを選択します。

例：oinstall

「次へ」をクリックします。

b. oraInstRoot.sh の実行ダイアログ・ボックス

プロンプトが表示されたら、異なるシェルで root ユーザーとして oraInstRoot.sh スクリプトを実行します。このスクリプトは、oraInventory ディレクトリにあります。

スクリプトを実行した後で、「続行」をクリックします。

4. 「ファイルの場所の指定」画面

「名前」：この Oracle ホームを識別する名前を入力します。

例：OH_J2EE

「パス」: インストール先のディレクトリへのフルパスを入力します。これは Oracle ホームです。インストール先ディレクトリが存在しない場合は、インストーラによって作成されます。

例: /opt/ora_j2ee

「次へ」をクリックします。

5. 「インストールする製品の選択」画面

「Oracle Application Server 10g」を選択し、「次へ」をクリックします。

6. 「インストール・タイプの選択」画面

「J2EE and Web Cache」を選択し、「次へ」をクリックします。

7. 「製品固有の前提条件のチェック」画面

システムがこの画面に表示される要件を満たしていることを確認し、「次へ」をクリックします。システムが要件を満たしていない場合は、警告が表示されます。カーネル・パラメータを変更する必要がある場合は、「再試行」をクリックしても操作を続行できません。インストーラを終了して、インストールを再実行します。

8. 「インストール前の要件の確認」画面

この画面に表示される要件を満たしていることを確認して、すべてのチェック・ボックスを選択し、「次へ」をクリックします。

44 Oracle Application Server クイック・インストレーション・ガイド

9. 「構成オプションの選択」画面

この Oracle Application Server インスタンスでキャッシュ機能を使用する場合は、「**Oracle Application Server 10g Web Cache**」を選択します。

「**Oracle Application Server 10g Farm Repository**」は選択しないでください。

「**Identity Management Access**」は選択しないでください。

「**次へ**」をクリックします。

10. 「ポート構成オプションの指定」画面

「**自動**」を選択し、「**次へ**」をクリックします。

11. 「インスタンス名と ias_admin パスワードの指定」画面

「**インスタンス名**」: このインスタンスの名前を入力します。インスタンス名には、英数字および _ (アンダースコア) を使用できます。1 つのコンピュータに複数の Oracle Application Server インスタンスがある場合は、インスタンス名は一意である必要があります。

例: J2EE

「**ias_admin パスワード**」および「**パスワードの確認**」: ias_admin ユーザーのパスワードを入力して、確認します。これは、このインスタンスの管理ユーザーです。

パスワードは 5 文字以上で、そのうちの 1 文字は数字にする必要があります。

「次へ」をクリックします。

12. 「サマリー」画面

選択した内容を確認し、「インストール」をクリックします。インストーラによって、ファイルがインストールされます。

13. root.sh の実行ダイアログ

注意：このスクリプトは、ダイアログ・ボックスが表示されるまで実行しないでください。

別のウィンドウで root ユーザーとしてログインし、root.sh スクリプトを実行します。このスクリプトは、このインスタンスの Oracle ホーム・ディレクトリにあります。

root.sh スクリプトを実行した後で、「OK」をクリックします。

14. 「コンフィギュレーション・アシスタント」画面

この画面には、Oracle Application Server コンポーネントを構成する Configuration Assistant の進捗状況が表示されます。

15. 「インストールの終了」画面

「終了」をクリックして、インストーラを終了します。

6 Portal and Wireless または Business Intelligence and Forms 開発者トポロジのインストール (OracleAS Infrastructure を含む)

これらのトポロジによって、OracleAS Portal、Oracle Application Server Wireless および OracleBI Discoverer などのコンポーネントを使用するアプリケーションをデプロイできるようになります。

Portal and Wireless 開発者トポロジを設定するには、次のものをインストールする必要があります。

1. OracleAS Infrastructure
2. Portal and Wireless 中間層

Business Intelligence and Forms 開発者トポロジを設定するには、次のものをインストールする必要があります。

1. OracleAS Infrastructure
2. Business Intelligence and Forms 中間層

Portal and Wireless 中間層および Business Intelligence and Forms 中間層は、OracleAS Infrastructure のサービスを使用するため、最初に OracleAS Infrastructure をインストールする必要があります。

ヒント: OracleAS Infrastructure と、Portal and Wireless または Business Intelligence and Forms 中間層を異なるコンピュータにインストールできます。

6.1 OracleAS Infrastructure のインストール

新しいデータベースと新しい Oracle Internet Directory を使用して OracleAS Infrastructure をインストールするには、次の手順を実行します。

1. インストーラを起動します。詳細は、[第 4 章「インストーラの起動」](#)を参照してください。
2. 「ようこそ」画面
「次へ」をクリックします。
3. コンピュータにはじめて Oracle 製品をインストールする場合は、インストーラによって次の画面が表示されます。
 - a. 「インベントリ・ディレクトリと資格証明の指定」画面

「インベントリ・ディレクトリのフルパスを入力してください」: インベントリ・ディレクトリへのフルパスを入力します。このディレクトリは、製品ファイル用の Oracle ホーム・ディレクトリとは異なります。

例: /opt/oracle/oraInventory

「オペレーティング・システム・グループ名の指定」：インベントリ・ディレクトリへの書込み権限を持つオペレーティング・システム・グループを選択します。

例: oinstall

「次へ」をクリックします。

b. oraInstRoot.sh の実行ダイアログ・ボックス

プロンプトが表示されたら、異なるシェルで root ユーザーとして `oraInstRoot.sh` スクリプトを実行します。このスクリプトは、`oraInventory` ディレクトリにあります。

スクリプトを実行した後で、「**続行**」をクリックします。

4. 「ファイルの場所の指定」画面

「名前」：この Oracle ホームを識別する名前を入力します。

例: OH_INFRA

「パス」：インストール先のディレクトリへのフルパスを入力します。これは Oracle ホームです。インストール先ディレクトリが存在しない場合は、Oracle Universal Installer によって作成されます。

例: /opt/oracle/oraInfra

「次へ」をクリックします。

5. 「インストールする製品の選択」画面

「OracleAS Infrastructure」を選択し、「次へ」をクリックします。

6. 「インストール・タイプの選択」画面

「Identity Management and OracleAS Metadata Repository」を選択し、「次へ」をクリックします。

7. 「製品固有の前提条件のチェック」画面

システムがこの画面に表示される要件を満たしていることを確認し、「次へ」をクリックします。システムが要件を満たしていない場合は、警告が表示されます。カーネル・パラメータを変更する必要がある場合は、「再試行」をクリックしても操作を続行できません。インストールを終了して、インストールを再実行します。

8. 「インストール前の要件の確認」画面

この画面に表示される要件を満たしていることを確認して、すべてのチェック・ボックスを選択し、「次へ」をクリックします。

9. 「構成オプションの選択」画面

「Oracle Internet Directory」を選択します。

「OracleAS Single Sign-On」を選択します。

「OracleAS Delegated Administration Service」を選択します。

「OracleAS Directory Integration and Provisioning」を選択します。

50 Oracle Application Server クイック・インストレーション・ガイド

「OracleAS Certificate Authority」は選択しないでください。

「高可用性およびレプリケーション」は選択しないでください。

「次へ」をクリックします。

10. 「ポート構成オプションの指定」画面

「自動」を選択し、「次へ」をクリックします。

11. 「Internet Directory のネームスペースの指定」画面

「推奨ネームスペース」を選択し、「次へ」をクリックします。

12. 「データベース構成オプションの指定」画面

「**グローバル・データベース名**」: OracleAS Metadata Repository データベースの名前を入力し、ドメイン名をデータベース名に追加します。

グローバル・データベース名のデータベース名の部分は、次のように指定します。

- 英数字のみを使用できます。
- 8文字以下で指定する必要があります。
- 大文字の「PORT」または「HOST」という単語は使用できません。これらの単語を使用する必要がある場合は、小文字を使用してください。

グローバル・データベース名のドメイン名の部分は、次のように指定します。

- 英数字、_ (アンダースコア)、- (マイナス) および # (番号記号) を使用できます。
- 128 文字以下で指定する必要があります。

例: `orcl.yourcompany.com`

「**SID**」: OracleAS Metadata Repository データベースのシステム識別子を入力します。通常、これはグローバル・データベース名ですが、ドメイン名は含めません。SID は、すべてのデータベースで一意である必要があります。

この SID 名には、前述したグローバル・データベース名のデータベース名の部分と同じ制限事項があります。

例: `orcl`

「**データベース・キャラクタ・セットの選択**」: データベースに使用するキャラクタ・セットを選択します。

「**データベース・ファイルの場所**」: データ・ファイル・ディレクトリの親ディレクトリへのフルパスを入力します。このディレクトリはすでに存在している必要があります、このディレクトリへの書き込み権限を所有している必要があります。

インストーラによって、指定したパスのサブディレクトリにデータ・ファイルがインストールされます。インストーラは、サブディレクトリの名前にデータベース名を使用します。たとえば、グローバル・データベース名に `orcl.yourcompany.com` と指定し、データベース・ファイルの場所に `/data/dbfiles` と指定すると、インストーラは、次のディレクトリにデータベース・ファイルを格納します。
`/data/dbfiles/orcl`

ディレクトリを配置するファイル・システムには、1.3GB 以上の空きディスク領域が必要です。格納するデータ量に応じて、本番データベース用に追加のディスク領域が必要です。

「[次へ](#)」をクリックします。

13. データベース・スキーマのパスワードの指定 画面

データベース管理ユーザーのパスワードを設定します。これは、データベース管理に使用する権限付きアカウントです。すべてのユーザーに同じパスワードを使用することも、ユーザーごとに異なるパスワードを使用することもできます。

「[次へ](#)」をクリックします。

14. 「インスタンス名と ias_admin パスワードの指定」画面

「**インスタンス名**」: このインスタンスの名前を入力します。インスタンス名には、英数字および _ (アンダースコア) を使用できます。1 つのコンピュータに複数の Oracle Application Server インスタンスがある場合は、インスタンス名は一意である必要があります。

例: infra

「**ias_admin パスワード**」および「**パスワードの確認**」: ias_admin ユーザーのパスワードを入力して、確認します。これは、このインスタンスの管理ユーザーです。

パスワードは 5 文字以上で、そのうちの 1 文字は数字にする必要があります。

例: welcome99

「**次へ**」をクリックします。

15. 「サマリー」画面

選択した内容を確認し、「**インストール**」をクリックします。インストールによっては、ファイルがインストールされます。

16. root.sh の実行ダイアログ

注意: このスクリプトは、ダイアログ・ボックスが表示されるまで実行しないでください。

別のウィンドウで root ユーザーとしてログインし、root.sh スクリプトを実行します。このスクリプトは、このインスタンスの Oracle ホーム・ディレクトリにあります。

root.sh スクリプトを実行した後で、「OK」をクリックします。

17. 「コンフィギュレーション・アシスタント」画面

この画面には、Oracle Application Server コンポーネントを構成する Configuration Assistant の進捗状況が表示されます。

18. 「インストールの終了」画面

「終了」をクリックして、インストーラを終了します。

6.2 Portal and Wireless または Business Intelligence and Forms 中間層のインストール

次の手順を実行すると、Portal and Wireless または Business Intelligence and Forms 中間層がインストールされ、[第 6.1 項「OracleAS Infrastructure のインストール」](#)でインストールした OracleAS Infrastructure を使用するように構成されます。

1. インストーラを起動します。詳細は、[第 4 章「インストーラの起動」](#)を参照してください。
2. 「ようこそ」画面

「次へ」をクリックします。

3. コンピュータにはじめて Oracle 製品をインストールする場合は、インストーラによって次の画面が表示されます。

a. 「インベントリ・ディレクトリと資格証明の指定」画面

「**インベントリ・ディレクトリのフルパスを入力してください**」：インベントリ・ディレクトリへのフルパスを入力します。このディレクトリは、製品ファイル用の Oracle ホーム・ディレクトリとは異なります。

例：/opt/oracle/oraInventory

「**オペレーティング・システム・グループ名の指定**」：インベントリ・ディレクトリへの書き込み権限を持つオペレーティング・システム・グループを選択します。

例：oinstall

「**次へ**」をクリックします。

b. oraInstRoot.sh の実行ダイアログ・ボックス

プロンプトが表示されたら、異なるシェルで root ユーザーとして oraInstRoot.sh スクリプトを実行します。このスクリプトは、oraInventory ディレクトリにあります。

スクリプトを実行した後で、「**続行**」をクリックします。

4. 「ファイルの場所の指定」画面

「名前」：この Oracle ホームを識別する名前を入力します。

例：OH_PORTAL

「パス」：インストール先のディレクトリへのフルパスを入力します。これは Oracle ホームです。インストール先ディレクトリが存在しない場合は、Oracle Universal Installer によって作成されます。

例：/opt/oracle/oraPortal

「次へ」をクリックします。

5. 「インストールする製品の選択」画面

「Oracle Application Server 10g」を選択し、「次へ」をクリックします。

6. 「インストール・タイプの選択」画面

「Portal and Wireless」または「Business Intelligence and Forms」を選択し、「次へ」をクリックします。

7. 「製品固有の前提条件のチェック」画面

システムがこの画面に表示される要件を満たしていることを確認し、「次へ」をクリックします。システムが要件を満たしていない場合は、警告が表示されます。カーネル・パラメータを変更する必要がある場合は、「再試行」をクリックしても操作を続行できません。インストーラを終了して、インストールを再実行します。

8. 「インストール前の要件の確認」画面

この画面に表示される要件を満たしていることを確認して、すべてのチェック・ボックスを選択し、「次へ」をクリックします。

9. 「構成オプションの選択」画面

Portal and Wireless の場合、次のものを選択します。

- **Oracle Application Server Portal**
- **Oracle Application Server Wireless**

Business Intelligence and Forms の場合、次のものを選択します。

- **Oracle Application Server Portal**
- **Oracle Application Server Wireless**
- **Oracle Business Intelligence Discoverer**
- **Oracle Application Server Personalization**
- **Oracle Application Server Reports Services**
- **Oracle Application Server Forms Services**

「次へ」をクリックします。

10. 「ポート構成オプションの指定」画面

「自動」を選択し、「次へ」をクリックします。

11. Oracle Internet Directory の接続情報を入力します。Oracle Internet Directory は、OracleAS Infrastructure のインストール時にインストールされます。

a. 「Oracle Internet Directory への登録」画面

「**ホスト名**」: Oracle Internet Directory を実行しているコンピュータの名前を入力します。

「**ポート**」: Oracle Internet Directory がリスニングしているポートのポート番号を入力します。Oracle Internet Directory のポート番号は、ORACLE_HOME/install/portlist.ini ファイルを確認します。ORACLE_HOME は、OracleAS Infrastructure のインストール先です。

「**Oracle Internet Directory には SSL 接続のみ使用**」を選択した場合は、portlist.ini ファイル内の Oracle Internet Directory (SSL) パラメータからポート番号を取得する必要があります。

「**次へ**」をクリックします。

b. 「OID ログインの指定」

「**ユーザー名**」: orcladmin と入力します。これは、Oracle Internet Directory 管理者の名前です。

「パスワード」: orcladmin ユーザーのパスワードは、インフラストラクチャの `ias_admin` ユーザーのパスワードと同じです。このパスワードは、インフラストラクチャをインストールしたときに入力したものです (第 6.1 項「[OracleAS Infrastructure のインストール](#)」の手順 14 を参照)。

「次へ」をクリックします。

12. 「Oracle Application Server 10g Metadata Repository の選択」画面

「リポジトリ」: この中間層インスタンスで使用する OracleAS Metadata Repository を選択し、「次へ」をクリックします。

13. 「送信メール・サーバー情報の指定」

この画面は、Business Intelligence and Forms インストールを選択した場合にのみ表示されます。

OracleAS Reports Services で使用する送信メール (SMTP) サーバーの名前を入力します。名前を空欄にしておいて、後から設定できます。「次へ」をクリックします。

14. 「インスタンス名と `ias_admin` パスワードの指定」画面

「インスタンス名」: このインスタンスの名前を入力します。インスタンス名には、英数字および `_` (アンダースコア) を使用できます。1 つのコンピュータに複数の Oracle Application Server インスタンスがある場合は、インスタンス名は一意である必要があります。

例: PORTAL

60 Oracle Application Server クイック・インストレーション・ガイド

「ias_admin パスワード」および「パスワードの確認」: ias_admin ユーザーのパスワードを入力して、確認します。これは、このインスタンスの管理ユーザーです。

パスワードは 5 文字以上で、そのうちの 1 文字は数字にする必要があります。

例: welcome99

「次へ」をクリックします。

15. 「サマリー」画面

選択した内容を確認し、「インストール」をクリックします。インストーラによって、ファイルがインストールされます。

16. root.sh の実行ダイアログ

注意: このスクリプトは、ダイアログ・ボックスが表示されるまで実行しないでください。

別のウィンドウで root ユーザーとしてログインし、root.sh スクリプトを実行します。このスクリプトは、このインスタンスの Oracle ホーム・ディレクトリにあります。

root.sh スクリプトを実行した後で、「OK」をクリックします。

17. 「コンフィギュレーション・アシスタント」画面

この画面には、Oracle Application Server コンポーネントを構成する Configuration Assistant の進捗状況が表示されます。

18. 「インストールの終了」画面

「終了」をクリックして、インストーラを終了します。

7 「ようこそ」 ページへのアクセス

インストールの後に Oracle Application Server の「ようこそ」 ページにアクセスして、インストールに成功したことを確認します。「ようこそ」 ページの URL は、次のとおりです。

```
http://hostname.domainname:http_port
```

ORACLE_HOME/install/portlist.ini ファイルを確認して、*http_port* を特定します。このポートは、「Oracle HTTP Server listen port」行に表示されます。

注意： 1つのコンピュータに複数の Oracle Application Server インスタンスがインストールされている場合は、各インスタンスが独自のポート番号のセットを持っています。正しい Oracle ホーム・ディレクトリの portlist.ini ファイルを確認し、必ず正しいポート番号を使用してください。

「ようこそ」ページには、次のような役立つページへのリンクが含まれています。

- Oracle Application Server 10g リリース 2 (10.1.2) の新機能
- Oracle Enterprise Manager Application Server Control (Application Server Control)。これは、ブラウザベースの管理ツールです。
- リリース・ノート
- 次の操作
- デモ

8 既存の Oracle データベースへの OracleAS Metadata Repository のインストール

OracleAS Metadata Repository を既存の Oracle データベースにインストールする場合は、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant と呼ばれるツールを実行します。

Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant は、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant の CD に格納されています。

このツールの使用方法の詳細は、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant のユーザーズ・ガイドを参照してください。

9 追加情報

この項では、次の内容について説明します。

- [製品のライセンス](#)
- [オラクル社カスタマ・サポート・センターへのお問合せ](#)
- [製品マニュアルの入手方法](#)

製品のライセンス

このメディア・パックに含まれている製品は、トライアル・ライセンス契約に基づき、30日間、インストールおよび評価できます。ただし、30日間の評価期間後もいずれかの製品の使用を継続する場合、プログラム・ライセンスをご購入いただく必要があります。

オラクル社カスタマ・サポート・センターへのお問合せ

Oracle 製品サポートをご購入いただいた場合、オラクル社カスタマ・サポート・センターに、年中無休で24時間いつでも、お問い合わせいただけます。Oracle 製品サポートの購入方法、またはオラクル社カスタマ・サポート・センターへの連絡方法の詳細は、オラクル社カスタマ・サポート・センターの Web サイトを参照してください。

<http://www.oracle.com/lang/jp/support/>

製品マニュアルの入手方法

Oracle 製品のマニュアルは、HTML および Adobe 社 PDF 形式で提供されており、入手方法がいくつかあります。

- メディア・パック内のディスク：
 - プラットフォーム固有のマニュアルは、製品ディスクに含まれています。マニュアルにアクセスするには、**CD-ROM** のトップレベル・ディレクトリにある `welcome.htm` ファイルを参照してください。
- Oracle Technology Network Japan の Web サイト：

<http://www.oracle.com/technology/global/jp/documentation/>

PDF ドキュメントを表示するには、必要に応じて、Adobe 社の Web サイトから、無料の Adobe Acrobat Reader をダウンロードしてください。

<http://www.adobe.com/>

10 その他の情報

クイック・リファレンス

リソース	連絡先 / Web サイト
開発者向けのテクニカル・リソースにアクセスできます。	http://www.oracle.com/technology/global/jp/
インストール・マニュアルにアクセスできます。	http://www.oracle.com/technology/global/jp/tech/install/
サポート・サービスに関する情報にアクセスできます。	http://www.oracle.com/lang/jp/support/
日本オラクル技術営業の連絡先です。	0120-155-096 (受付時間などの詳細は後述)

オラクル製品のインストールに関する情報

オラクル製品のインストールに関する情報およびマニュアルを提供しています。

次の URL をご参照ください。ただし、個々の環境に依存する問題、検証が必要なケースはサポート・サービス（有償）の締結が必要になりますのでご了承ください。

□ OTN インストール・センター

<http://www.oracle.com/technology/global/jp/>

上記 URL から「テクノロジーセンター」→「インストール方法」を
ご覧ください。

□ Oracle Technology Network 掲示板

<http://www.oracle.com/technology/global/jp/>

上記 URL から「掲示板」→「ビギナー」→「初心者の部屋」をご覧
ください。

□ インストレーション・ガイド・ダウンロード

<http://www.oracle.com/technology/global/jp/>

上記 URL から「マニュアル」→「<製品名>」→「<OS>」をご覧
ください。

□ 製品 FAQ 検索

<http://support.oracle.co.jp/>

上記 URL から「製品 FAQ 検索」をご覧ください（キーワード：「イ
ンストール」、「install」など）。

これらを参照しても解決されないインストール時の不明 / 問題点について
は支援サービスを提供しています。次のオラクル製品が対象になりますの
で、次の URL からご質問をお願いいたします。

□ インストールサービスご利用方法

http://www.oracle.co.jp/install_service/

- 対象製品
Oracle Database Standard Edition
Oracle Database Personal Edition
- 対象 OS
Linux x86
Microsoft Windows

Oracle Technology Network Japan

OTN Japan は開発者に必要な技術リソースを提供する会員制の日本オラクル公式技術サイトです。OTN Japan にご登録（無償）いただくと、技術資料、オンライン・マニュアル、ソフトウェア・ダウンロード、サンプル・コード、掲示板、オラクル関連書籍のディスカウント、OTN 有償プログラムなど様々なサービスを受けることができます。

□ OTN Japan 登録方法

<http://www.oracle.com/technology/global/jp/>

上記 URL から「各種ガイドライン」→「はじめての方へ」をご覧ください。

□ 技術資料

<http://www.oracle.com/technology/global/jp/products/>

オラクル製品の最新情報を提供します。目標とする技術資料をすばやく参照できるわかりやすいカテゴリーになっています。

□ ソフトウェア・ダウンロード

<http://www.oracle.com/technology/global/jp/software/>

オラクル製品のトライアル版、早期アクセス版、ユーティリティ、ドライバなどを無償でダウンロードできます。最新バージョンをタイムリーに掲載していますので、**OTN Japan** で提供している技術資料、ドキュメントなどとあわせて使用することにより、いち早く最新のオラクル・テクノロジーを体験できます。

□ ドキュメント

<http://www.oracle.com/technology/global/jp/documentation/>

オラクル製品のインストール・ガイド、リリース・ノートなどのドキュメント（マニュアル）を掲載しています。製品に同梱されているドキュメントから有償マニュアルに至るまで、最新のドキュメントをタイムリーに掲載しています。

□ サンプル・コード

http://otn.oracle.co.jp/sample_code/

開発者がちょっとしたところで苦勞するプログラムのサンプルを掲載しています。オラクル最新テクノロジーに準拠したサンプル・プログラムの数々をお役立てください。

□ 掲示板

<http://otn.oracle.co.jp/forum/index.jspa?categoryID=2>

オラクル製品を使用して開発される皆さんのためのコミュニティです。Web によるディスカッション・フォーラム（掲示板）を通して、オラクル開発者間で情報交換ができます。それぞれの開発ノウハウを共有することで、より効率的な開発ができます。

□ OTN 有償プログラム

<http://www.oracle.com/technology/global/jp/upgrade/>

OTN 有償プログラムは、OTN 会員様向けの有償アップグレード・サービスです。OTN Japan サイトでご提供している無償サービスに加え、最新のオラクル製品を開発ライセンスでご使用いただける OTN Software Kit（日本語版 CD-ROM）の送付やオラクル技術書籍ご購入時のディスカウントなど、有償ならではの様々なサービスをご提供いたします。

- お薦めサービス「SQL 構文検索サービス」
<http://otn.oracle.co.jp/document/sqlconst/>
SQL 文や SQL 関数をオンラインで参照できる SQL 構文検索サービスです。
- お薦めサービス「Oracle エラーメッセージ検索」
<http://www.oracle.com/technology/global/jp/reference/msg/index.html>
オラクル製品の使用中に表示されるエラー・メッセージについて検索します。
- お薦めサービス「TechBlast メールサービス」
<http://www.oracle.com/technology/global/jp/techblast/>
OTN Japan では配信を希望された会員の皆様へほぼ月に 1～2 回メールをお送りしています。新着情報のほか、会員の皆様にぜひともお知らせしたいセミナーやイベント情報、読み物として製品や最新技術に関する連載を掲載しています。

OracleDirect

OracleDirect では、電話とインターネットを通じて、製品ご購入前のオラクル製品に関連するお問い合わせをはじめとする、お客様からの様々なお問合せに対応いたします。

OracleDirect に関する詳細は、次の Web サイトをご覧ください。

<http://www.oracle.com/lang/jp/corporate/contact.html>

□ お問い合わせ先

TEL : 0120-155-096

Web 問合せ :

<http://www.oracle.com/lang/jp/corporate/contact.html>

※ 受付時間 : 9:00 ~ 12:00、13:00 ~ 18:00 (土、日、祝祭日、年末年始を除く)

また、OracleDirectにてお受けできるご質問内容は以下の通りとなりますので、ご連絡の前にご確認ください。

ご質問にお答えできる内容 (概要)

- 製品に関して日本国内で公表されている一般的な内容
 - 出荷日、出荷予定日
 - 価格およびライセンス
 - システム要件

- ハードウェア（メモリ容量、ディスク容量）
- ソフトウェア（対応 OS、対応コンパイラなど）
- 製品の基本機能（カタログに記載されているレベルまで）
- 製品バージョン（RDBMS、Net などの接続対応バージョンの案内）
- サポート・サービス契約の概要

※ サポート・サービス契約の照会、確認、お見積もりはディストリビューションセンターまでお願いいたします。

- カタログ、資料請求、セミナー内容に関するお問合せ
- お客様の個別環境への提案
- 製品概要の説明や応用例、システム構成について営業担当者への直接相談

以下のお問い合わせにはお答えできませんので、あらかじめご了承ください。

- マニュアルに関すること（オンライン・マニュアルも含む）
- 国内未発表の内容（日本オラクルが正式に公表した内容以外のもの）
- 他社から販売されているオラクル関連製品に関するお問合せ
- 技術的な内容（テクニカル・サポート・レベル）

サポート・サービス

オラクルではお客様のシステムの健康状態を維持するために、サポート・サービスをご用意しています。オラクル製品のエキスパートが、様々な形でお客様の問題解決のお手伝いをいたします。

- 障害回避策提示
- 修正プログラムの提供
- インターネット・サポート
- 技術情報の提供 など

Oracle Support のサポート契約をご締結のお客様は、以下の技術サポートを受けられます。サポート・サービスにはインターネットなどによる技術サポートの他、各種技術情報へのアクセス、ご契約済み製品の最新バージョンの提供、Oracle Support NewsLetter（毎月）の提供などが含まれます。

技術サポート

ご契約のお客様は、インターネットなどによる技術サポートを受けられます。

お問合せは、毎日 24 時間受付けております。お問合せの方法についての詳細は、初回ご契約時にお送りする「スタートアップ・キット」をご覧ください。

インターネットでは、次の Web サイトで Oracle Support について紹介しています。

<http://www.oracle.com/lang/jp/support/>

□ Oracle MetaLink

Oracle Support では、24 時間ご利用いただけるグローバルなポータル・サイトとして Oracle MetaLink をご用意しています。作業効率を高める強力な情報管理機能や、パーソナライズ機能などを備えています。

- 世界中で蓄積された 40 万件以上もの技術情報（英語）
- オラクル製品エキスパートへの日本語と英語どちらでも可能な技術問い合わせ
- 24 時間いつでも可能な最新のオンライン・セミナー（英語）
- 自動化されたヘルス・チェック機能や技術問い合わせ情報の統合管理など、先進的なサポート・ツール

□ ナレッジ・ベース KROWN

KROWN は、お客様からの技術問い合わせなどを基にして、これまでに 47,000 件以上の技術情報を収録したナレッジ・ベースです。情報は日々、追加 / 更新されており、常に最新情報を入手できます。

また、製品別 / システム・ライフサイクル別にナレッジを分類するディレクトリ・サービスでは、ライフサイクルの各フェーズで有効な技術情報により、トラブルを未然に防ぐこともできます。

□ Oracle Support NewsLetter

毎月更新されるサポート技術情報や、新しいバージョンの製品情報などを Email または Web でお届けします。Oracle Support NewsLetter には以下の情報が掲載されています。

- 重要技術情報
- 製品パッチ情報
- その他 サポート・サービス関連情報

□ お問い合わせ先

日本オラクル株式会社 ディストリビューションセンター

TEL : 0570-093812

※ 受付時間 : 9:00 ~ 12:00、13:00 ~ 17:00 (土、日、祝祭日、年末年始を除く)

ディストリビューションセンターでは、Oracle Support のサポート契約について、以下のような情報をご案内いたします。

- 新規サポート契約に関するご相談
- サポート契約に基づくサービス内容のご紹介

- サポート契約書の記入方法
 - サポート・サービス料金について
- または、次の Web サイトにアクセスしてください。

<http://www.oracle.com/lang/jp/support/>

研修サービス

日本オラクルの研修サービスに関する詳しいお問合せは下記までお願いいたします。研修サービスに関する詳細は、次の Web サイトでもご紹介しています。

http://education.oracle.com/pls/web_prod-plq-dad/db_pages.getpage?page_id=3&p_org_id=70&lang=JA

□ お問合せ先

日本オラクル株式会社 オラクルユニバーシティ

TEL : 0120-155-092

※ 受付時間 : 9:00 ~ 12:00、13:00 ~ 17:00 (土、日、祝祭日、年末年始を除く)

11 ドキュメントのアクセシビリティについて

オラクル社は、障害のあるお客様にもオラクル社の製品、サービスおよびサポート・ドキュメントを簡単にご利用いただけることを目標としています。オラクル社のドキュメントには、ユーザーが障害支援技術を使用して情報を利用できる機能が組み込まれています。HTML 形式のドキュメントで用意されており、障害のあるお客様が簡単にアクセスできるようにマークアップされています。標準規格は改善されつつあります。オラクル社はドキュメントをすべてのお客様がご利用できるように、市場をリードする他の技術ベンダーと積極的に連携して技術的な問題に対応しています。オラクル社のアクセシビリティについての詳細情報は、Oracle Accessibility Program の Web サイト <http://www.oracle.com/accessibility/> を参照してください。

ドキュメント内のサンプル・コードのアクセシビリティについて

スクリーン・リーダーは、ドキュメント内のサンプル・コードを正確に読めない場合があります。コード表記規則では閉じ括弧だけを行に記述する必要があります。しかしスクリーン・リーダーは括弧だけの行を読まない場合があります。

外部 Web サイトのドキュメントのアクセシビリティについて

このドキュメントにはオラクル社およびその関連会社が所有または管理しない Web サイトへのリンクが含まれている場合があります。オラクル社およびその関連会社は、それらの Web サイトのアクセシビリティに関しての評価や言及は行っておりません。